

鹿児島県立短期大学 人文学会論集 「人文」 第四〇号 (二〇一六年一〇月三十一日発行)
抜刷

(翻訳)

ロンドンでの無言劇

ジョン・リドゲイト 作
轟 義昭 訳

(翻訳)

ロンドンでの無言劇

ジョン・リドゲイト 作
轟 義 昭 訳

はしがき

ジョン・リドゲイトは「十四万五千行もの詩作を残した、類を絶する多作家」¹と知られている。「ロンドンに取り上げた『ロンドンでの無言劇』(A Mummery at London) は一四二七年に「ロンドンにいたこの国の貴顕の前」で上演された寓意的な仮面劇である。三四一行の無言劇は「祝いの催しの幕あい」²としての役割を果たし、五つの場面からなる。「観あれ！登場してきたこの貴婦人」(二行目)、「観あれ！皆さんの面前にいるこの貴婦人は」(二三九行目)、「ここににいる貴婦人 正義を、観あれ！」(二七三行目)、「注目せよ！この魅力的な貴婦人は」(三二二行目)、「ここに、観のこの第四の貴婦人は」(二八一行目)の語句に示されるように、無言劇は舞台上登場した俳優たちに観客の目を引き付けながら、解説者によって説明される形式を取っている。解説者は、最初、運命の女神を紹介する。彼女の特性、彼女の住処、彼女が転落させた者たち(アレクサンダー大王、シーザー、クロイソス)の説明は長い。その後、この運命の女神に打ち勝つことができる古代哲字の四徳目(思慮分別、正義、堅忍不拔、節制)が紹介される。このうち、思慮分別、正義、堅忍不拔の様相は特徴的である。思慮分別は運命の女神に抵抗するために

「深慮の鏡」を手を持ち、過去・現在・未来を斟酌する三つの目がある。正義は天秤を持ち、買収されないように手と目が無い。堅忍不拔は、「公益のために」活動するため、剣を持つ。彼らの様相は観客にインパクトを与えたに違いない。観客はその所以を聞くため、解説者の説明に耳を傾けたことだろう。

リドゲイトはこの無言劇を通して何を訴えているのか。彼は「王侯の没落」(一四三二―三三八)のなかで、修道士として運命の女神の存在を否定・抹殺する立場を取る。とりわけ第三巻では運命の女神と満足貧乏、Glad Pouert を争わせて前者の抹殺論の展開に余念がない。しかしながら、中世において異教観念が民間に依然として存続しつづけていたため³、その作品全体の中で彼女の存在を完全に否定できるまでには至っていない。言い換えると、修道士の立場とは別に、民間信仰の立場を考慮して民間信仰のなかに根付いた運命の女神へ対抗する手段を訴える必要性を感じていたに違いないことがわかる。このような理由で、リドゲイトは古代哲字の考え方にも着目し、貴顕が集まる祭典で無言劇を通して、運命の女神に対抗する教訓的な教えを論じていたと考えられる。

この無言劇は四徳目が運命の女神に有効であることを説いているが、観客の前で演じられていることで効果が倍増する。視覚効果はこの無言劇だけでなく、彩飾画にも見られることを最後に述べておく。注目に値する彩飾画は、四徳目と運命の女神を題材にしたオーストリア国立図書館所蔵写本二五九一番三七葉である⁴。玉座には神聖ローマ皇帝チャールズ五世がいるが、彼の足元には六つの紋章が付いた車輪がある。その車輪の回転を堅忍不拔と(左手に轡を持った)節制の徳目が止めようとしている。その前方には(布で目

隠された。運命の女神が両手を紐できつく縛られて立っている。彼女の両側には（右手に剣と天秤を持った）正義と（右手に鏡を持った）思慮分別の徳目がいいて、運命の女神が逃げないようにしている。この彩飾画を一瞥しただけで、四徳目は運命の女神に打ち勝つという教訓を読み取る事ができることだろう。

この作品はリドゲイトの運命の女神に対する考え方を理解するうえで重要な資料になると思い翻訳を試みた。なお、訳出にあたっては、Henry Noble MacCracken ed., *The Minor Poems of John Lydgate* (The Early English Text Society, O.S.192, 1961 rpt.) のテキストを底本とした。

注

- 1 齊藤美洲 (編著) 『イギリス文学史序説 社会と文学』(中教出版 一九七八年)、六九ページ参照。
- 2 Derek Pearsall, *John Lydgate* (London, Routledge & Kegan Paul, 1970), p.187; Lois A. Ebin, *John Lydgate* (Boston, Twayne Publishers, 1985), p.87.
- 3 H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature* (New York, Octagon Books, Inc., 1967 rpt.), p.33.
- 4 轟義昭『中世ヨーロッパ写本における運命の女神画像集 補遺』(成美堂、二〇〇〇年)、Fig.136を参照。

ロンドンでの無言劇

「覽あれ、ロンドンにいたこの国の貴顕の前で、ペリーの修道士ジョン・リドゲイトによって作られた、仮装の催しが行われる。運命の女神、思慮分別、正義、堅忍不拔の貴婦人方の仮装である。催し物は道徳的なもので、滑稽で、注目に値する。最初に登場したのは運命の女神である。

「覽あれ！登場してきたこの貴婦人、

無常を司る貴婦人は、

運命の女神と呼ばれ、

同じ場所にほとんど留まらない。

彼女には二心があるように、

刻一刻

氣質を変えて

いつも変化に富んでくる。

『薔薇物語』^{註1}の記述のように、

掛け値なしに

明確に述べると、

彼女の館は海に聳える

不毛の岩場にある。

片側は、

島のような小山と接する。

- その地面には時々
瑞瑞しい花々が咲き乱れ、
その色合いは驚くほど美しい。
様々な樹木も生い茂り、実を結ぶ。
小鳥たちも嬉しそうに
囀り、調べを奏でる。
楽しく奏でる音楽においては、
高音もいれば、低音もいる。
西風もまた
穏やかで温和な息吹を吹きかけ、
天候を澄み渡らせ、好天にし、
季節を恵みで満たす。
しかし突然、瞬く間に、
この素晴らしい場所に
波が打ち寄せ、全てを破壊してしまふ。
まず瑞瑞しく色鮮やかな花々を
波は茎から萎れさせ、
その美しさに危害を加える。
すると、轉る小鳥たちは別れを告げる。
あらゆる木々の小枝と大枝から
運命の女神は美しさを奪い、
葉と花は落ちてしまふ。
そんな場所に、隔てられ変形した
- 36
- 32
- 28
- 24
- 20
- 16
- 彼女の邸宅がある。
ご想像どおり、
邸宅の片側は、さしあたり、
金、銀、宝石で見事に細工され、
その豪華さは語り尽くせない。
しかしその邸宅の反対側は
身の毛がよだつほど
荒廃している。
その本丸は粘土で覆われ、
常に倒壊の危機にある。
外観上、片側は美しく、
反対側は、実質、
雨、風、雹に痛めつけられている。
突然荒れ狂う洪水が
その邸宅に襲いかかり、
ここかしこ水浸しにする。
この貴婦人の住処を
守る救済策も手立てもない。
彼女の館が常に不安定であるように、
彼女自身もあてにならない。
彼女は決して同じ場所に満足しない。
今日ある者を金持にしたかと思えば、
自らの無常の掟に従い、
- 60
- 56
- 52
- 48
- 44
- 40

明日には貧困へと追い込む。

最も偉大な人物を没落させることができる。

彼女はアレクサンダー大王を勝利させ、

敢えて彼に挑む者は誰もいない。

しかし、何時の間にか、彼を車輪から投げ落とす。

ユリウス・カエサルに対してもそうした。

好意を寄せることに気乗りがしなかつたが、

最初彼を勝利させた。

実際、パン屋の息子から

彼を偉大な皇帝にし、

元老院議員らの勢力を物ともせず、

ローマ全土の統治者にした。

しかし、いたるところで、彼の戦勝の

栄光が燦然と輝き、

栄冠が授けられると、

突然運命の必滅の定めにより

ご覧あれ！大勝利後、

カピトル神殿の元老院会議場で

彼は短剣で刺され殺害された。

ご覧あれ！如何にこの貴婦人が

王侯らの高貴さを損なえるかを。

彼女の貯蔵室には二つの大酒樽がある。

ひとつの酒樽には、砂糖、甘い香辛料

84

80

76

72

68

64

美味な地下茎が加えられ、

澄んだビメントで溢れるほどだ。

しかしさらに最悪なのは、

もうひとつの酒樽がひどく苦いもので溢れていることだ。

片方の酒を飲んだ者は、

もう片方の酒もきつと飲む。

その者の突然の変容は尋常ではない。

何故なら彼女は低い身分から高い身分へ

人の位を高めることができるからだ。

気に留めれば、身分が変わることは

昔話のなかにもある。

一例あげると、羊飼いのギユゲースを

指輪の力で、

彼女は立派な王にした。

敢えて述べると、不法な謀殺で、

彼は高位に就いた。――

最も忌まわしい事例だ。

国王の中でも大富豪の

クロイソスはかなり傲慢だったので、

余を不安にするものなどはこの世にないし、

王たる余の身分を揺さぶるものなど

この世にないと思っていた。

遂にある夜彼は夢を見た。

104

100

96

92

88

注9。 ユノが彼を空中に浮かせ、

注9。 ユピテルが両手で彼に水を施し、

注10。 ポイボスが彼の手拭いを持っていることに彼は気を留めた。

その後、この夢の謎について

注11。 レリオペーと呼ばれた

彼の娘は明細に述べ始め、
前もって予言した、

王は絞首刑に処せられるだろうと。
これが彼女の説明だった。

ご覧あれ！彼の傲慢さはどれほど挫かれたことか。
これらの変化を追求すれば、

この不実な貴婦人がその変化をめぐらして、
戦勝者らの立派な偉業を
思いも寄らない攻撃で低下させた。

詩人が書いた物語詩を読みなさい。
そして様々な悲劇のなかで、
哀歌のなかで

彼らの没落を見出すでしょう。――
私が語る以上のことを――

海でも陸でも、彼女の車輪から転落し、
どれほど彼らが逆境に陥ったことか。

それゆえ、彼女の虚栄、彼女の横柄さ、彼女の傲慢さ、

128

彼女の悪意に立ち向かうために、
彼女がしばらく留まるならば、

四人の貴婦人がほどなく此処に遣って来て、
運命の力を圧倒してくれるでしょう。

仮にも彼女がこの場所で大膽になって、
一度でも二心を見せようとするれば、

この盲目で不実な女神の
悪意もまた阻んでくれることでしょう。

次に登場したのは、四人の中の最初の貴婦人、思慮分別である。

ご覧あれ！皆さんの面前にいるこの貴婦人は
詩人らによって思慮分別と呼ばれている。

彼女は眩い鏡を手にし、
深慮遠謀と

深慮と呼ばれる鏡によって、
適切に洞察力を働かせ、

運命の女神と彼女の力に
しっかりと抵抗する。
注12。 セネカが言うように、ご覧のとおり、

思慮分別には三つの目がある。
とりわけ睨むことで

常に十分に思いを巡らして、

148

144

三つの物事を斟酌するためだ。

つまり、過去のこと、現在のこと

そして今後起る未来のことを斟酌するためだ。

彼女は誰よりも先に見て、

精神的な苦勞をせつせと背負い込み、

あらゆる面で慎重に

現在のことを定め、

今後のことを準備し、

現に起ったことを

記憶に留めようとする。

私見であるが、このようにする者には、

自らの防御手段として

確かに三つの目があり、

正真正銘の深慮の鏡を備えている。

その場合、この貴婦人がその者の嚮導者となり、

親切な運命の女神にも強情な運命の女神にも

彼女の全勢力に対抗して

あらゆる面で守ってくれる。

何故なら思慮分別によって制御される

すべての民衆は、現に、抵抗して

彼女の勢力から免れ

自由の身になろうとしているからだ。

172

168

164

160

156

152

次に姿を現したのは、第二の貴婦人、正義である。

ここにいる貴婦人、正義を、覽あれ！

彼女はあらゆる徳の統治者である。

何故なら天秤を用いて

彼女はそれらを統轄しているからだ。

疑う余地はなく、彼女は

友愛關係、贈り物、賄賂に目もくれないし、

親切な行為も恐ろしい行為も無視する。

何故なら公平な判決は買収されないからだ。

觀察すると、

彼女には手もなければ目もない。

彼女はずつと昔に手を失くした。

何故なら近親者からも敵対者からも

如何なる贈り物も受け取らないからだ。

彼女は視力も失った。

何故なら彼女は公平に振舞い、

身分の高い者にも低い者にも

どちらの側にも顔を向けることはなく

両者に公平無私な態度で臨むためだ。

またどちらの側も特別扱いすることなく、

正当な扱いをするためだ。

この件に関しては、

192

188

184

180

176

ある裁判官のことを耳にするかもしれない。
彼は生涯故意に
自らの口で
虚偽の判決を下すことは決してなかった。
歴史は彼のことを物語る。
明瞭な説明によると、彼の死後、
三百年以上経つが、
彼の亡骸は
変質して腐敗した。
それは確かなことである。
しかし口元と唇は
薔薇のように魅惑的で赤味を帯び、
腐敗せずに全く無傷なままだった。
真相を言えば、公正に
彼が判決を言い渡したからだ。
天秤を手にしたこの貴婦人は
彼と知り合いだった。
彼女は裁判において彼に
公正な判決を下させた。
それゆえに、この貴婦人は、
公正を表す天秤を
翳かざしている。だから、
運命の女神の二心に

216

212

208

204

200

196

動じることはまったくくない。
正義はすべき事において
あちこち立場を変えることなく、
常に同じ立場にあるからだ。
ご覧あれ！次に登場したのは、堅忍不拔と呼ばれる第三の貴婦人である。
注目せよ！この魅力的な貴婦人は、
堅忍不拔と呼ばれる。
哲学者らは自らの考えで
莊嚴と呼ぶ傾向にあった。
しかし逆境に対して
確固として動じず、
あらゆる悪徳にも立ち向かうため、
彼女はもっぱら堅忍不拔と呼ばれる。
そのしるしに剣を持ち、
何事にも恐れを抱かない。
彼女はまた公益のために、
勇気を出して、
大事を引き受け、
勇壮な企てを引き受ける。
庶民を救済するために、
彼女は大いに力を発揮する。

236

232

228

224

220

特に真実に基づく場合だ。

その上善良な庶民を擁護する際、

彼女に怠惰さは見られない。

彼女は確固たる信念によつて

運命の女神のあらゆる襲撃も

彼女の変動も物ともしない。

何故なら荘厳というこの徳目は

自らの卓越した力で

古の哲学者らの身を固めたからだ。

決して語られなかった俗界のことについては、

ディオゲネス^{注13}、プラトン^{注14}、ソクラテスのことを

じっくり考えてみなさい。

彼女はカルタゴのスキピオに^{注16}

公益のために多くの物事を

生涯請け負わせた。

彼は恐怖のために諦めようとはしない。

王国を守るため、

強大な町のローマに敵対した。

彼女はヘクトルに^{注17}町のために

如何なる逆境にも思いとどまることなく、

力強い戦士として、

怯むことなく

256

252

248

244

240

このようにこの貴婦人は、心に留めると、

戦士たちを確固不拔にし、

目的を遂げるまで

危険な事を引き受けるようにした。

九偉人^{注18}のことを、

その上最近実在した者のことをよくよく考えよ。

先頃の王侯のことを言っている。

敢えて言えば、ヘンリー五世^{注19}だ。

彼はその一人に数えられるかもしれない。

彼は着手した勇壮な企てを

成し遂げるまで止めることはなかった。

思うに、しかも皆さん方の想像どおり、

力、思慮分別、正義の

三人の貴婦人たちは

彼の顧問だった。

彼はこの貴婦人たちと深く結び付き、

運命の女神を屈服させた。

堅忍不拔の貴婦人は、勇気を奮つて、

忠誠を支援し、悪事を行わない。

さあ、身分の高い者も低い者も、

今年のクリスマスは彼女を迎え入れなさい。

280

276

272

268

264

260

三人の貴婦人たちの話が終わると、舞台上に登場したのは、魅惑的で賢い節制

と呼ばれる、第四の貴婦人である。

ここでご覧のこの第四の貴婦人は、
控え目で、感じが良く、顔付きも真面目な方で、
節制と呼ばれている。
あらゆる事を統轄し、
彼女の姉妹たちの準備をしようとして、
墮落行為を浄化し、
彼女らを不動にする。
従妹の素面と協同して
彼女らに墮落行為をさせはしない。
雄々しく手綱を握り、
その中で彼女らに自由を与え、
あらゆる不正行為を避ける。
慎重に彼女らを鍛錬し、
忍耐力を持たせ、
謙遜さと謙虚さを持たせ、
とりわけ傲慢さを捨てさせる。
暴飲暴食を自制させ、
身持ちの悪い仲間を避けさせ、
サイコロ博打と酒場を避けさせ、
素面を用いて彼女らを制御する。
真心をこめて

300

296

292

288

284

できるだけすべての人を愛させ、
常に意図的に最善のことを言わせる。
上手く言える人は後悔することはない。
悪口、暴飲暴食を
あなたの仲間から取り除き、
憎悪を退けなさい。
とりわけ報復する場合
軽率にならないで、常に待つていなさい。
待つ行為に後悔はないからだ。
このように雄々しい人は
上手くこの姉妹と知り合いになる。
確かに、認められるならば、
この四人に取り仕切られる者は一
こういうことだ。
その者は思慮分別の深慮の鏡を持つだろう。
あらゆる物事、とりわけ
降り懸る前の危難を熟慮すると一
正義が管理する
天秤を持ち、
自らの護身に
莊嚴の剣をしつかりと握る人は、
あらゆる不運から守られることだろう、
とりわけ節制が

324

320

316

312

308

304

三人の姉妹を取り仕切る時だ。

それゆえ楽しい時でも悲しい時でも

運命の女神の制約を受けないで済む。

その間、運命の女神を少しも恐れないで、

彼女と知り合いになることを避けなさい。

彼女には表裏のある変転があるからだ。

そして彼女の仲間から逃避し、

彼女の同志すべてを避けなさい。

陽気な顔付きをした四人の姉妹たちよ、

今年ずっとここに

この家庭に留まってくつろいでください。

喜びと繁栄を

一家にもたらししてください。

さあ、四人の方々よ、

心をこめて、

暖炉の辺りで新曲を、

皆さんの十八番おはこの曲を歌ってください。

完

〔訳注〕

注1 ギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンによって書かれた十三世紀フランスの愛の寓意物語 篠田勝英訳『薔薇物語』(上・下) (ちく)

ま文庫、二〇〇七年)を参照。

注2 マケドニアの王(紀元前三六―三三三年)。

注3 紀元前一〇〇―四四年。ローマの将軍・政治家。

注4 カピトリウム。古代ローマのユピテル(ジュピター)の神殿。

注5 蜂蜜と香料を加えたブドウ酒。

注6 「ギリシア神話」百手の巨人の一人。

注7 リュディア最後の王(紀元前五六―五四六年)。バビロニアやエジ

プトとの交易で莫大な富を築いたとされる。

注8 「ローマ神話」ユピテルの配偶者。

注9 「ローマ神話」ジュピター、神々の王で天の支配者。

注10 「ギリシア神話」アポロンの呼称の一つ。

注11 チョーサー「修道僧の物語」では、ファニー「Phanye」と呼ばれてい

る。榊井迪夫訳『完訳 カンタベリー物語』(下) (岩波文庫、一九九

五年)、四六頁を参照。「ファニーと呼ばれている彼の娘はこのように

明々白々たる警告を与えました。」

注12 紀元前四世紀?―紀元六五年。ローマのストア派の哲学者・政治家・

劇作家。ローマ皇帝ネロ(五四―六八)の教師・執政官。

注13 紀元前四二?―三三〇年。古代ギリシアの犬儒学派の哲学者。

注14 紀元前四二七?―三四七?年。ギリシアの哲学者。ソクラテスの弟

子。

注15 紀元前四六九―三九九年。ギリシアの哲学者。

注16 スキピオ・アフリカヌス(紀元前三六―一八三年)を指す。

注17 アキレスに殺されたトロイの王子。

注18

中世において最も偉人とされた九人の人物。ヘクトル、アレクサンダー大王、ユリウス・カエサルの三人の異教徒、ヨシユア、ダビデ、ユダス・マカバイオスの三人のユダヤ人、アーサー王、シャルルマーニュ(カール大帝)、ゴドフロア・ド・ブイヨンの三人のキリスト教徒の九人が典型的な例。

注19

イングランド王(二四二二―二四二三年)。

(二〇一六年六月二〇日受理)